

## 高脂血症小児の生活指導指針に関する研究

分担研究者	大阪大学小児科	藪	内	百	治
研究協力者	岩手医科大学小児科	畠	山	富	而
	東北大学小児科	多	田	啓	也
	日本大学小児科	大	国	真	彦
	東京女子医科大学小児科	草	川	三	治
	東京慈恵会医科大学青戸分院内科	中	村	治	雄
	都立小児病院	熊	谷	通	夫
	京都府立医科大学小児科	楠		智	一
	宮崎医科大学小児科	早	川	国	夫
	宮崎医科大学公衆衛生	常	俊	義	三

### 〔研究目的〕

本邦では成人の虚血性心疾患による死亡は年々増加の傾向にあり、今後ますます増加傾向をとると考えられている。虚血性心疾患は動脈硬化によって起こるが、動脈硬化をきたすもっとも大きな因子は高コレステロール血症であるといわれる。そしてこのような動脈硬化は既に小児期から徐々に形成されることが通説となっている。当研究班ではこのような情勢を考え、高脂血症に関連する種々の因子を分析するとともに、小児期に高脂血症を見だし、生活指導を行いその指針を確立することにより、動脈硬化の進展防止をはかることを目的とする。

### 〔研究成果〕

東北から九州に至る各地区で、小学生、中学生、高校生などの小児を対象に血清コレステロールの検索を行った。血清コレステロールが 200mg/dl をこえる小児の頻度は地区によって 6～7% から 20% くらいと差がみられるが、一般的には約 10% 前後に高コレステロール血症がみられると考えてよいようである。小児の血清コレステロール値は従来からいわれているように、学童期は比較的一定した値を示し、中学生の頃に一たん低下し高校生では再び上昇する傾向がみとめられている。また血清コレステロール値が同一人でどのように変動するかの検索も行われており、高脂血症小児の指導にとっても重要な指針を与えると思われる。さらにこれらの測定により家族性高コレステロール血症の家系が見いだされており、今後の指導が重要である。

高脂血症に関与する諸種因子のうち、もっとも重要な役割を果たすと考えられている食事との関連も、いくつかの地区で調査が行われた。食事の内容、組成は地区によって差があり、大阪では宮崎に比して蛋白、脂肪の摂取が多かった。食品の分析では大阪で米穀類の摂取が少なく、鳥獣肉類の摂取が増加している傾向が認められている。高コレステロール血症と密接な関連をもつ P/S 比はほぼ 1 前後であったが、宮崎の学童では 0.74 と低値を示し、動物性脂肪が植物性脂肪を上回っている成績が得られた。学童期からの食事習慣は将来にも大きい影響をもつことを考えると、注意が必要である。一般的にみて、

小児は間食が多く、しかも脂質、糖質の多いものが好まれ、間食が1日の総エネルギーに占める比率が高くなっている。飲みものとしては牛乳より清涼飲料や嗜好飲料が好まれ、牛乳の摂取が減少する傾向にある。また副食では野菜の摂取が少なく、インスタント食品などが手軽に使われており、バランスのとれた食事をしていないように思われた。食事は肥満とも密接な関連があり、さらに肥満児に高コレステロール血症が高頻度にみいだされることから、小児期の適正な食事摂取が重要である。

食事中の脂肪組成、P/S比などと血清コレステロールについても検討が行われている。P/S比を高くすることにより血清総コレステロールは低下し、一方HDL-コレステロールは上昇する傾向がみられている。また続発性の高脂血症においてもP/S比の上昇により良好な効果が認められており、今後の食生活指導上重要な知見であるといえる。

#### 〔まとめ〕

今年度は研究の初年度で開始が遅れたにもかかわらず、高脂血症に関する多方面からのアプローチが試みられ有用な結果が得られた。今後も血中脂質に関与するいくつかの因子についての検討を行い、高脂血症の対策に役立てる予定である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 〔研究目的〕

本邦では成人の虚血性心疾患による死亡は年々増加の傾向にあり、今後もますます増加傾向をとると考えられている。虚血性心疾患は動脈硬化によって起こるが、動脈硬化をきたすもっとも大きな因子は高コレステロール血症であるといわれる。そしてこのような動脈硬化は既に小児期から徐々に形成されることが通説となっている。当研究班ではこのような情勢を考え、高脂血症に関連する種々の因子を分析するとともに、小児期に高脂血症を見いだし、生活指導を行いその指針を確立することにより、動脈硬化の進展防止をはかることを目的とする。